

菊池恵楓園附属保育所「龍田寮」最後の保母たち

——ハンセン病問題聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

2012年6月18日、福岡安則と黒坂愛衣は、熊本県合志市にある国立ハンセン病療養所「菊池恵楓園」の面会人宿泊所「溪楓荘」に、地元合志市在住の木村チズエさん(1932年9月13日生、聞き取り時点で79歳)と森三代子さん(1934年4月1日生、聞き取り時点で78歳)にご足労ねがって、聞き取りをさせていただいた。

おふたりは、菊池恵楓園附属保育所「龍田寮」の最後の保母である。

二人とも、昭和一桁の年代に農村部に生まれた女性にもかかわらず、親の理解と本人の向学心により、家庭がさほど裕福でもなかったのに、戦後の学制が旧制から新制に切り替わる時期に、高等学校を卒業している。そして、木村は1952年12月に、森は1953年4月に「龍田寮」に勤める。この時期は戦後の「無癩県運動」が渦巻いていた。にもかかわらず、二人の親は「結核は怖い、ハンセン病はそうそうウツルものではない」と娘の就職を歓迎している。そのような認識が、ハンセン病療養所の地元住民の一部とはいえ、明確にあったことは興味深い事実である。

龍田寮には、親がハンセン病を発症して恵楓園に収容されて、引き取り手のない、ゼロ歳児から中学生までの子ども約70人が暮らしていた。1953年の終わりに、恵楓園の宮崎松記園長が、龍田寮の小学生たちが地域の黒髪小学校への通学を認められず、龍田寮内の分教場に押し込められていることを不当とし、新1年生から本校への通学を求めたことから、「黒髪校事件」とも「龍田寮事件」とも呼ばれる騒ぎが勃発する。地元住民の多数派が通学拒否の反対運動を組織し、さらには龍田寮自体の閉鎖を求める排斥運動を強力に展開したのだ。

お二人の語りからは、多数派住民の偏見差別から子どもたちを守ろうとし、龍田寮が閉鎖になったあとも、恵楓園の事務官として勤務し続け、あてがわれた官舎を、龍田寮出身の子どもたちが盆や正月に「里帰り」できる場として維持し続けた生涯がうかがわれる。かつて「未感染児童」とラベル貼りされた子どもたちに対して、献身的な姿勢を揺るがせることなく、最後まで寄り添い続けたお二人の生きざまには、頭がさがる。

キーワード：ハンセン病問題、附属保育所、龍田寮、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学、fukuoka@mail.saitama-u.ac.jp

** くろさか・あい、東北学院大学准教授、社会学、kurosaka@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

本稿はJSPS科研費18K02003および19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。なお、文責は言うまでもなく筆者自身にある。

旧制から新制への切替時に高校を卒業して

木村 木村チズエと申します。昭和7年9月13日〔生まれ〕。誕生日がくれば80歳。〔菊池恵楓園のある現〕合志（こうし）市で生まれました。当時は農業が主体でしたね。畑が中心。〔土地が豊かではなく〕唐芋しかできなかった。〔うちは〕小作。農地解放で一町〔手に入りましたが〕三町はないと〔暮らしが大変でした〕。

母は再婚でした。先妻が亡くなったあとに〔後妻に〕来た。上に2人〔異母兄妹が〕いました。私の実のきょうだいは2人です。〔下に〕妹がいます。

〔国民学校の時代でしたが〕学校、好きでした。お勉強もできました（笑）。

〔敗戦のときは〕高等女学校でした、旧制の。〔国民学校の〕6年生から受験して。母が、萱を切って、蓑を作って、笠を編んで、それを売りながら、私の学資をつくって、〔学校に〕やってもらいました。〔父も母も上の学校には〕行っていないですが、私が〔行きたいと言いました〕。

〔高等女学校へ行っても、戦争中は勉強は〕できなかったです。奉仕作業ばかり。田植えに行ったり。お芋の草取りに行ったり。〔それと、薙刀で訓練。〕薙刀は小学校のときからでした。

〔昭和20年8月15日の敗戦の日のことは〕覚えています。いろんなニュースが飛び交いました。「女性、子どもは殺される」ちゅって、怖かったです。うちの跡を取って農業をした兄がですね、「殺されるから」ちゅって、山に仮の小屋を建てに行っただけですよ。——〔兄は兵隊に〕取られましたけど、脚気で帰ってきて、終戦はうちで迎えました。

森 森三代子でございます。本名（ほんめい）はカタカナのミヨコなんですよ。でもずうっと、三代子（さんだいこ）できてます。昭和9年4月1日〔生まれ〕です。78。〔やはり〕合志市〔の生まれ〕です。

〔うちは〕祖父がちょっと失敗しましてね。部落でもちょっと財産持ちだったんですけど、金遣いが荒うございまして、財産なくして。菊池に相撲を引いたり芝居を引いたりするのが好きだったらいいですね。興行ですね。〔祖父は〕その自分が失敗したのを自慢げに話してくれて、子どもの頃、面白くてですね。そんな思い出がありますね。なくしたのに、「あそこもうち〔の土地だった〕、ここもうち〔のだった〕」とか教えてくれるような、人のいい祖父でした。

だから、小作でしたものね。小作というか、〔働き手が〕戦地に行った家の田畑（でんぱた）を借りて、つくってました。

きょうだい7人おりました。上から4人、女ですね。〔私はその〕3番目です。下3人、男でございます。「3番目だから三代子（さんだいこ）と付けた」って、父が言うんですよ。だけど、終戦後、戸籍が、ほら、登録するのが変わりましたでしょ。そのときに役場が間違っ、カタカナの「ミヨコ」になったんですね。「三代子（さんだいこ）にミヨコとふりがなをふった」って父は言うんですよ。そしたら、「三代子」が消えて、「ミヨコ」が本名になっったんですよ。〔でも〕小学校から、もうずうっと三代子で来てるもんだから、恵楓園〔の勤め〕も三代子でした。それで、20年〔勤続の〕表彰かなんかのときにですね、戸籍謄本を取らにゃなかったんですよ。そしたら名前がちがうということで、恵楓園で大事（おおごと）だったんです。そういうこともあるから、みんな、いちおう確認しろっていうてね、〔みんな〕住民票を取って調べたりしたんですよ。それで、〔私は〕家庭裁判所に〔昔の出生届が〕あるはずだ

から〔訂正してほしい〕ということで行ったんですよ。そうしたら、「それはもう焼却して、ない」って。それならもう仕方がないということで、公的なものは「ミヨコ」。〔日常的には〕「三代子」。で、いま、茶道（おちゃ）してますけど、肥後古流のお茶を教えるのも「三代子」。〔話を先取りしてしまいますが〕保育所から恵楓園のほうに配置替えになって、そしたら、土日祭日、お休みでしょ。まあ、時間があって困ったねっていうことで、何しようかということでも〔お茶を〕始めたんですよ。

〔小学校 1 年に上がったときの国語読本は〕「サイタ サイタ サクラガサイタ」でした。〔私は学校の勉強の出来は〕普通じゃないですかね。駆けっこも嫌いでした。

小学校の頃に〔菊池恵楓園のことはいろいろ〕聞いてますよ。「らいの施設だ」って。恵楓園は〔園内の〕檜山（ひのきやま）に火葬場がありましたでしょ。亡くなったら、煙が出るんですね。「ああ、また、きょうも恵楓園で誰か死んだべえ」「火葬しよって、燃えよとったい」っていうてね、煙を見たりね、そういうのがありましたよ。遠足なんかで〔恵楓園の近くを〕通るときに、その光景を見えています。そして、ここの近くに母の里があったもんだから、行ったり来たりするときに、ああ、またって。やっぱり、近づくといかんというようなね、感じはありましたです。

終戦は、国民学校 6 年生のときです。5 年、6 年は、分散教育でした。たとえば地名が、白壁部落、中林部落とか、こう、いくつかあったんですよね。だいたいムラに、昔は、お宮とかが一つずつあるんですね。そこが拠点で、部落ごとに、そこでお勉強したり、それから、出征家族の農家にお手伝いに行ったりするのがほとんどでね。勉強は、6 年生になったらほとんどしてません。

〔昭和 20 年 8 月 15 日も〕部落ごとでした。何曜日だったんでしょうかね。〔水曜日でしたか。〕「うちに帰りなさい」と言われて、ラジオ〔の玉音放送〕は、家に帰ってから聞きましたね。〔聞いても〕はっきりわからなかったんですよ。そうしたら、女学校に行ってた姉たちが帰ってきて、「負けた」というので、あら、負けた、というのがわかってね。そして、「〔顔に〕炭を付けにゃいかん」とか「〔髪のを切って〕頭は丸めたほうがいい」とか。うちは、ほら、〔娘が〕4 人おりましたからね。もう、父が心配してね。〔戦争が終わって〕ホッとしたという感じは、覚えてませんね。やっぱり、進駐軍がね、上陸してくるということが、もういちばん〔頭に〕あった。

父は〔当時、近くの〕黒石駐屯地の憲兵隊に〔出ていました〕。私たちの小さいときには、朝鮮の警察かなんかで行ってますものね。

〔私は〕学校は、高校までです。私たちのときはちょうど切替えて、入学は旧制に受けて入って、途中で六三三〔の新制〕に切り替わって。併設中学ということで 3 年いて。それから高校に進むなら、またおんなし学校で 3 年行かなきゃいけない。中学に旧制で入った人たちが、一クラス 70 何人いたですよ。それが、上級には行かないって、3 年で退学して。残ったのは 30 人いなかったでしょうかね。〔さらに〕1 学年で辞める、2 学年で辞める。〔高校を〕卒業したのは 9 名です。

そのあいだ通いますでしょ。すると、部落でも途中で辞めた人が何人か同級生がいるでしょ。その家族から嫌な目で「ミヨちゃんは、よかろう、よかろう」って皮肉を言うから、もう嫌で嫌です。私、行きたくない、行きたくない

って言いながら行ったんです。父に「自分のところはきょうだいも多いし、もう勤めに出らんといかん。勤めに出るように、勉強せんといかん」って言われて苦痛でしたね。それでも、そのおかげでいまがあると思って感謝してます。

高校卒業〔のあと、もっと上の学校へという〕話はありましたけど、やっぱり、行けませんでしたね。

木村 私は〔進学〕の希望に燃えてましたね。親戚に、ちょっと学のある人がいて、そのオジが「いまから先は、女性も勉強しないとダメだ」って説得に来てですね。「先生になったほうがいい」つって、師範学校〔受験〕を勧めたんです。でも、〔年の離れた〕兄が「経済的に、絶対できない。農家を継いでもらわんとしょうがない」ということで諦めました。

森 戦後は〔父は〕家畜商ですね。黒石の教育隊におったときに、隊長さんの馬の世話をしていたらしいですよ。で、馬が好きで。終戦になってから、みんな農家に馬がおりますでしょ。それが病気だちゅうちゃ、父のそこへ来るわけですね。〔すると〕うちにおった馬をやって。私たちは、「なんで、そぎゃんことをせにゃんね」って、嫌でしたけどね。ほら、やっと馬が馴れたと思うと、よそにやってしまう。それが〔父の〕本業になってしまったですね。

恵楓園の一千床拡張後の職員募集に応募して

木村 恵楓園の職員募集があったんですよ。恵楓園の一千床拡張のときに。昭和26年ぐらいですかね。そのときに試験を受けたんですよ。たしか、2000人ぐらいの受験者のなかから、わずか何十名しか通らなかったんですよ。私は事務官の試験を受けるつもりが、私をここへ斡旋してくださった方が「保母という仕事があるから、そちらのほうで受けたほうがいいんじゃない」と言われて、途中で切り替えて、保母のほうを受験して。そしたら、見事落ちました。でも、そのあと、何年もしないうちに補欠で声がかかったんです。

〔私はそれまで、学校を終えたあと〕しばらくは役場の農地委員会に勤務してました。でも、自分の希望もあってですね、役場を辞めて、こちらのほうを受験したんですよ。ちょこっと継ぎ目のところはですね、農業をしてましたね。

たまたま、斡旋してくださった方がクリスチャンだったもんですから、教会生活に入ったんですよ。それで、スムーズに、ここの受験ができて。恵楓園の認識もそのときに頂いて。〔恵楓園の〕隣に〔国立療養所〕再春荘がありますでしょ。「〔結核患者のいる〕再春荘は怖いけど、恵楓園は接触しないと感染しないから安全だ」というイメージで、恵楓園の受験を勧められたんです。

森 〔私が高校を卒業した頃は〕就職難でしたもんね。〔とにかく〕就職せにゃいかんでしょ。近くで製糸工場の事務〔の仕事〕があるからといっても、〔父が〕「あそこはいかん」と。福岡に行くといっても、父の許しが出ませんものね。しばらくしてましたら、民生委員の方がここの試験があるって。「高校を出れば受験資格がある」と。「該当者がおったら町から言ってきたけん、受けてみらんね」ちって言うてこられた。父が「そら、よか」つて。〔保母資格の〕受験のための講習会が女子大で3ヵ月ぐらいあったんですよ。〔その講習が終わったら〕県主催の保母試験があって、受けて通りましてね。

〔そのときの〕検査官が、あとで女子大で保育科を設立された吉崎先生という方で、その方が木村さんがいま行ってらっしゃる教会の理事かなんかしてらしたんですよ。で、〔民生委員の方に〕「こういう人が合志町から受けとるけど、

ちょっと、どういう人か見に行ってきた「ほしい」って言われたらしい。それである日、12月頃でしたかね、寒いときに、真っ白な髭の老人が来られて、「三代子さんのお宅はここですか？」祖母と二人、炬燵でお餅かなんか食べてたんですよ。出ていったら、「いま遊んでるなら、いますぐとは言われんけど、教会で保育園もできてるけんね、いらっしやい」と言われたから、「はい、すぐ行きます」っていうて、あくる日から弁当もって行ったんですよ。

木村 結果的には、二人ともですね、その同じ民生委員の方の推薦、斡旋だったんですよ。

森 それで、1月の途中から3月いっぱいまで、そこに通ってですね。そして、恵楓園の人事係のひとが「今度、保母さんを入れたいから」っていうことで、龍田寮に見学に来てってくださいって、感想文を書いて出して。そして、4月1日に〔恵楓園の〕庶務課長に会いに行ったんですよ。「あなたは保育所の〔職員の〕なかでいちばん若い。結婚するなんて思わずに、生涯を子どもたちのために捧げてください」と言われたから、本気で「はい」って言うたの、しっかり覚えてるんですよ。〔それが昭和〕28年〔の4月1日〕です。

木村 私は昭和27年の12月に龍田寮へ行きましたから、私が少し先輩なんですよ。看板には「龍田寮」と書いてありました。〔熊本市〕黒髪町431番地。電話が489番。——〔龍田寮は〕もちろん住込みです。24時間保育でした。

〔龍田寮の歴史ですが〕私もなんかで読んだだけですけれどね。〔昭和16年に九州癩療養所が〕国立移管になっ〔て菊池恵楓園になっ〕た後（とき）に、〔恵楓園内にあった〕保育所が〔熊本市の〕立田山（むこう）へ移ったんだと思うんですよ。

森 〔恵楓園の〕正門を入れて、右のほうに看護学校があったでしょ、寄宿舎ですね。その片隅に、子どもたちを預け〔る場所があっ〕て、炊事をずうっとされてたお婆さんが、姪御さんかなんかですよ、〔子どもたちの〕面倒みよったんですよ。そして、リデル、ライトの回春病院が〔昭和16年に〕もう撤退するようになったときに、そっちに移ろうということに話がなったんですよ。〔そして、龍田寮ができたのが昭和17年。〕

龍田寮の保育体制

森 職員の体制はですね、龍田寮主事がいましたね。〔まあ〕寮長といいますか。私たちのときは〔男の〕事務官の柳田さん。この人は通勤でしたね。

木村 〔そして〕渋谷おかあさん。

森 看護婦と保健婦〔の資格をもった方〕ですよ。年頃がお母さんに相当するような年代でしたね。〔その頃〕45、6でしょうかね。

保母主任が春山さん。その方は、リデル、ライトの回春病院（あそこ）の牧師をしてらした春山〔三彦〕牧師の奥さんです。長崎活水（かつすい）の大学の先生をしとられて、結婚されてこっちに來られた。で、牧師が〔昭和14年に〕亡くなられて未亡人になられたから、ライト先生のお付きのお世話をするような感じで、しとられたんですよ。そして、龍田寮の保母になられたんですよ。

木村 子どもたちは、私たち保母には「おねえさん」って呼んでました。上に姓を付けて、「木村ねえさん」「森ねえさん」ちってですね。

森 若いひとには「おねえさん」。〔ちょっと年輩の保母さんには〕「お婆さん」。「おねえさん」は5名いました。

木村 中おねえさんでしょ。あと、二月（ふたつき）さんと伊藤さんと。

森 二木さんは教員の免許をもっている人でした。

〔あと〕給食係の栄養士が1人。そして、草刈りとかの雑務をする男の人が山口さん。〔龍田寮は〕広がったです。〔寮のほかに〕分教場（ぶんこう）があって。幼児棟が新しくまた建って。

〔龍田寮の子どもたちは〕いちばん多いときで76人ぐらいでしたよ。「男子組」「女子組」「花組」「青組」「赤組」と分かれてる。赤組さんは3歳まで。保健婦さんが来たから、待労院に預けてあったゼロ歳〔児〕も引き取ったんですね。〔以前はゼロ歳児は〕待労院か慈愛園ですね。慈愛園は、〔この〕前まで〔熊本県〕知事をしとんなはった潮谷〔義子〕さんの義父（おとうさん）の塩谷総一郎さんが園長でした。

3歳から就学〔前〕までが青組さん。花組さんが6年生までの女の子。〔小中学生の〕男の子が〔男子組〕、春山さんが、気合いが入りよりましたから、受け持ちですね。〔女子組は中学生から〕上〔の女の子〕ですね。

花組と男子組と女子組は〔担当が〕1人でした。赤組さんと青組さんは2人で担当。土日なしです。そして月に1回、お休みがある。

木村 1泊で〔自宅に〕帰る。

森 それも、手当もなんにもないんですよ。もう、当たり前と思ってました。で、〔龍田寮が廃止になって配置替えて〕恵楓園に移ってきたらですね、土曜日に1時間残業しても、出るでしょ。人事〔課〕に文句を言いに行ったら、「あんたたちは、黙っとるけん、損したったい」と言われて、それでお仕舞いですよ。

木村 〔私は〕3歳未満児の乳児組〔の担当〕でした。〔乳児組は〕10名。夜は〔保母が〕2人で付きました。朝起きるとですね、ベッドからみんな起こして。洋服に着替えさせて。朝の洗面なんかをしながらですね、食事を部屋に運んで。食事のあとは自由保育でした。お外に散歩に行ったり、ベランダで遊んだり。

森 〔私は〕乳児の上、就学までの青組さんですね。男女一緒に24、5人おりました。いちばん多かったですものね。それを〔保母〕2人でみました。そして、当直も〔1日おきの〕当番でしたね！

朝早く、5時ぐらいには起きよったね。〔まず〕ベランダを拭いて。子どもたちを起こして。ベッドを片づけてですね。そして、保母が食事を取りに行くんですよ。テーブルに並べるときは、子どもたちが手伝ってですね。そして、食べて。〔私たちが勤めるようになって〕しばらくして別棟の幼児棟ができてね。遊戯室などがあって、そこでカリキュラムを立てた保育が始まって。それが10時から3時まで。それから〔寮に〕帰ってきて、夜の準備を一緒にして。——大変でしたよ。だけど、そんなの、なんとも思ってなかったですね。当たり前と思ってた。

「今日は、おねえさん、お休みよ」って言って〔自宅に〕行くでしょ。そうすると、〔龍田寮に〕帰る頃は、門の垣根のところに、みんな待ってるんですよ。だから、キャンデーとかね、お土産を買っていく。

〔子どもたちは〕たまに喧嘩することもありましたけど、そんなに目立った喧嘩は〔なかったですね〕。腕力の強い子とか、こすい子とかが、ちょっと悪戯して、泣かせたりはありますけどね。

〔恵楓園に入所している親が訪ねてくることは〕基本的にはなかったです。

隠れて〔子どもの様子を〕見に来たのが何回かありましたけどね。子どもたちは一年に2回、春と秋に、

木村 集団親子面会ですね。恵楓園（ここ）の広場でね。

森 〔子どもたちを〕それぞれの親（ふけい）に預けて、〔ピクニックのように〕お弁当を開いてね。〔でも〕私たちの裾を引っ張って、親のとこに行かない子もおりましたねえ。

〔集団親子面会のとき、子どもたちが親御さんと〕接触して〔龍田寮に〕帰ったら、髪も洗ってね。

木村 ぜんぶ脱いで、お風呂に入れて。

〔でも当時、私たちはウツルとは思っていませんでした。〕私たちは、地域的にもわりと啓蒙されてましたからね。接触伝染と聞いてましたけど、それは、直接、切り傷を〔触れ合わせるとかです。〕だから、ウツル、ウツラナイまでは思いませんでした。恵楓園はうつった職員（ひと）がいないという話はね、聞いてましたから。

森 うちの父が、〔就職の〕話が決まったときにですね、「〔親が〕ハンセン病でも、できた子どもは健康だ。あれはうつらんけん、よか」って言いましたね。おおっぴらには〔ウツルウツルと〕言いますが、やっぱ、みんな、そう思っていましたものね。

木村 〔恵楓園の宮崎松記園長は〕1ヵ月に1回は、かならず〔龍田〕寮まで足を運んで〔子どもたちの〕検診をやってらっしゃいましたね。

森 夕方ひょろっと、ご夫婦で来てね。

木村 〔それから〕6月25日の「救癩の日」には、ほとんど毎年、皇室から〔どなたかが〕見えてました。

森 救癩の会合が各県回りだったんですよね。たまたま、その〔昭和〕29年には熊本で会合があったから、〔高松〕宮様がおいでになって。

木村 やっぱり、宮様が来るとなると、大事（おおごと）です。

森 どの子に花束を渡させようか²、とかね。

木村 お茶をだすのも、ちゃんとリハーサルからやってですね、大変でした。お掃除も一生懸命。何日も前からトイレも別に掃除して、そこはもう立入禁止で。〔子どもたちには〕晴れ着を着せて。

森 国立でしたから、そういう金銭的なことは、よその〔民間の〕施設に比べれば、ようございましたものね。お正月には、新しいものをちょっと着たりですね。けっこう、きれいにしました。食べ物もよかったですしね。

〔子どもたちが龍田寮にいられるのは〕中学までですね。〔ただし〕高校生が1人いました、男の子が。その子は〔高校卒業後は〕大阪商船学校に行きました。女の子がね、「〇〇兄さんは高校へ行った。私も行きたいのに、行かれんのはどうしてか」って文句を言ったこともありました。その男の子は、特別でしたね。親戚のおバさんからお金が出るから、ということだったんです。〔彼は〕事故で片目を悪くして、それで船に乗れなくなって、陸（おか）にあがりましたけどね。

新1年生、本校通学拒否事件（黒髪校事件）

木村 〔龍田寮の子どもたちは地域の黒髪小学校には通えず、6年生まで龍田寮のなかの〕分教場でした。

森 [分教場は、校長を退職した] 宮崎先生が [一人で小学校の] 1年から6年まで [教えてました]。中学になると、[子どもたちは] 下のほう [の地域の中学校] に行ったんですけど。

木村 [あと] 女のオガタ先生。

森 [女の先生は] ちょっとでしたものね。

木村 [私たちが龍田寮に勤めた年に] 大騒ぎになりました。

森 宮崎園長の [来年度の新1年生から地域の黒髪小学校への通学を認めよ、という] 発言で、もう [地域は] ザワザワ。

木村 [昭和29年度の] 1年生から [本校への] 通学 (にゅうがく) を許可されてですね。そのときが、問題が起きて大変でした。

森 [昭和] 29年度の入学 [予定者] は8名おったんですね³。[この昭和] 29年度 [入学予定者に] は朝鮮の子 (ひと) が多かったです。3人いました。

[4月はじめの] しばらくは [保母が] 付き添って [黒髪小学校まで新1年生の] 送り迎えしましたもんね。[子どもたちが] 独りで行けるようになるかなというの、やっぱり、心配したですね。だけど [この年は、ほんの] ちょっと [の期間] しか本校 (がっこう) に行ってませんものね。

木村 [通学] 反対派の宣伝カーが [龍田] 寮の下を右往左往しました。そして、今夜は何時から、どこどこのお寺で集会をしますとか、拡声器 (マイク) で [宣伝しながら] 通ります。もう、ひどいことを言いながら、ですね。「らい病の子と一緒に勉強はさせない」とか。

森 私たちは、子どもをね、とにかく安全に守らにゃいかんから、そういうことにはノータッチ、という指令が出ていました。[子どもたちが] 「なんか、言いよるよ」って言っても、「あれはね、聞こえんでもよかったい」とか言うてね。

木村 それで、途中から、熊大の学長 (せんせい) とか商大の学長 (せんせい) が幹旋に入られて、自分とこに引き取ってですね、そこから通学できるようにしてくださったのが、やっぱり、1年ぐらいありましたかね。[昭和30年度の新1年生ですね。昭和30年度の新1年生は] 4名。1人、途中で斑紋があるちゅうことでボイコットされて、4人になったんですね。

森 なんか、親戚に引き取られていって、4名残って。そして、その4名が学長のとこに引き取られるなら、それなら [通学しても] よかろうという話になって。[高橋学長] ご夫妻が、自分たちが引き取る [子どもたち] ってどんな子だろうかっていうて、龍田寮に面会に来られたんですよ。けども、やっぱり、[その子どもたちの面倒を] みるのに、商大の学長 (かいちょう) のおうちに保母さんが交替で付いて行ったですね。[学長夫妻が] お年寄りでしたから [保母が学長官舎に泊まり込みました]。

[ただ、その4名のうち] 1人は、恵楓園 (こちら) の親がね、手許に引き取ったです。病気は出てなかったけど “要観察” っていうことですね。[結局、昭和30年度入学で本校に通った子は] 3人ですね。[その子たちも] 途中で [黒髪小学校から] いなくなりましたね。

木村 [誰一人] 卒業してませんよね⁴。

龍田寮の子どもの散散処理

森 [その騒ぎのなかで龍田寮は閉鎖されることに] になりました。昭和30年に

は〔子どもたちの〕分散が始まりました。

木村 慈愛園の潮谷園長が〔熊本市社会福祉〕協議会の会長をしてみましたからね。何人はどこどこ、何人はどこどこちゅう割り振りがですね、うちの恵楓園のほうの幹部と話し合いがあったみたいです。

森 就学前の〔朝鮮人の〕きょうだいを、私が待労院に預けに連れて行っただけですよ。別れて帰るときの〔情景〕は、こびりついてますね、いまでもね。ここに置〔いてい〕かれるって実感があったんでしょうね。〔泣きわめきながら〕「森ねえのバカ」って言われました⁵。〔でも、その子たちは〕待労院のほうから、別な学校に入学させたんです。それは教育委員会で話が通じとったんですよ。黒石の「少年の街」⁶ってありますでしょ。その施設にも何人が行きました。

木村 親戚の引き取り手のない子は、けっきょく、施設に分散されました。そのときの処置された子どもたちとは、みんな、涙の別れでしたよ、保母としてはですね。知らない施設に置いて帰らなきゃならないからですね。

森 〔親戚へ引き取られた子は〕半分はいなかったと思います。親戚が引き取る段階でも、やっぱり、相当問題がありました。親戚（そこ）へ落ち着いた子どもたちは、かえって、苦勞したみたいですね。施設に行ったほうがよかったかもしれないですね。いま思いますとね。星空を見て泣いたとか、そういう話〔を聞いています〕。何十年も経ってから訪ねてくる子が何人もおりましたね。見違えるように社会人になってましたけど、苦勞話を聞くとですね、身がつまりますねえ。

〔あと〕私がタッチした子どもでは、〔恵楓園に入った子どもが〕3人いましたね。1人はもう、どうもない人でね。2人は病気ですね。〔その2人の子は〕保育所にいるときは健康だった。で、親戚に引き取られていって、何年かしてから恵楓園（ここ）に入ってますね。

木村 〔恵楓園の入所者でも〕ノン（＝非ライ）の人がだいぶいましたからね。

森 〔龍田寮にいて、けっきょく恵楓園に入った人は〕私たちが恵楓園に配置替えになってからも、なかなか、目を合わせずにね、行きよりましたものね。だけど、私が退職するときに〔会いに〕来てですね、そして、だいぶ話しましたね。男の子でしたけどね。

木村 〔それから、恵楓園に入所していた父親が星塚敬愛園に転園するときに、むこうへ連れて行った子も〕いますね。

森 韓国のひと〔でしたね〕。お父さんが酒癖が悪くて。恵楓園から、まあ、追い出されたというようなかたちでね、転園して。で、子どもを〔連れて行った〕。

恵楓園の事務官への配置替え

森 〔龍田寮で働いたのは〕ちょうど4年ですね。

木村 はい、4年いましたね。

森 〔龍田寮で、子どもたちの〕散歩なんか〔外に〕行きますでしょ。そうすると、「職員も、やっぱり、〔患者の〕親族かなんかだ。〔きっと〕かかわりがあつとだろう」っていうふうに、みんな見てましたね。

木村 「でなかったら、あんなとこに就職するはずがない」と。

森 〔恵楓園に配置替えになったのが昭和〕32年の、私が2月。木村さんは4

月ですね。

木村 [私は] 残務整理を [したものですから、ちょっと遅くなりました]。

森 [当時はまだ] 看護婦 (かんごし) さんたち、お医者さんたちが [職員地帯から患者地帯に] 出入りをするところ、関門って行って、[そこで] 着物を作業着と着替えるんですね。そこには、ちゃんと [消毒液もありました]。

[とにかく昭和] 32年 [当時] は、外を通る [路線] バスに患者さんが乗ったという通報があると、消毒に行っていましたもんね。それ、記憶にあります。

木村 私は定年前に福祉の事務所で郵便係をしたことがあって、[その時点でも] 郵便物はぜんぶ、一回ホルマリンの消毒器に入れてから [園内にある郵便局へ] 出すんですね。

森 [消毒といっても液体に浸けるわけではなくて] 乾燥器のようなボックスのなかにポット入れる。

木村 はい。組織標本なんかをホルマリン浸けにするのとは、また別ですよ。ホルマリンが気体ようになってたんでしょうね。

[恵楓園に配置替えになってからの私たちの仕事は] 事務官です。まあ、[龍田寮にいた] 子どもたちが訪ねてくれば、ケースワーカー的な仕事も入ってきますけどもですね。

森 なんかあったときはもう、パッと出れるようにということで [事務本館勤務]。よその課に行けば、やっぱり、[はずせない] 仕事があってあれでしょうから、なんかそういうことを [園長先生は] 考えてはったみたいですね？

木村 私たちは、けっきょく、そういう子どもたちが来てもいいようにということで、[近くに自宅がありながら] 官舎を与えられてましたものね。だから、お正月は、そういう子どもたちがずっと来てました。

森 中学を終えると、就職させて、[龍田寮から] 出していましたからね。そういう卒業生が、社会人になってから、龍田寮があるときは龍田寮に来てました。[私たちが] 恵楓園に来てからは、二軒長屋 [の官舎] ですね、2人ずつおったんです。[こっちが] 春山さんと私。こっちが木村さんと伊藤さん。子どもたちが来るとね、そこで寝泊まりさせて。檜の桶風呂を買って、お湯を沸かしてお風呂へ入れたり、[近くの] 温泉に連れて行ったりね。

木村 [子どもたちは龍田寮を出たあと] ほとんど、身を秘めていた子が多いと思います。1人、大阪にいる男の子ですけどね。ちょうど [1995年の] 神戸震災のときに、ちょっと消息がわからなかったんです。それで、私は大阪に妹がいますから、なんとか安否を確かめました。その子とは、いまでも文通したり電話をしたりしてますけどね。まだいまでもやっぱり、秘めています。私たちのことをお嫁さんに言うときは、郷里の熊本の中学校のときの先生だとか、そういうふうには言ってるらしいです。

森 [私は結婚] しませんでした。[龍田寮に勤めるようになったときに、最初に言われた言葉を守ったわけでは] ないですけど、なんか、そうになりましたね。それで、ずうっと官舎 [住まい]。官舎の入居規定がありますよね。で、「森さんは、自宅が近いのに、[待遇が] よすぎる」とかなんとかいろんな批評を受けました。だけど、[詳しい事情は] 言われませんでしたよ。で、最後まで [官舎に] 入れていただきました。

[1990年の8月でしたかね] 東京から恵楓園に電話があつてね。ちょうど、

薬害エイズの事件（あれ）があったときです。その〔女の〕子がね、製薬会社に勤めておったんですよね。〔NHKのドキュメンタリーで〕取材〔を受けて〕放映されるから、誰か自分を知ってる人がいれば見てもらいたいと思って、恵楓園に電話したんですね。そしたら、当直の人が〔龍田寮のこととか私のことを〕知らずに〔切ってしまった。次にかかってくるときに〕回り回ってね、「森さんだろう」ちって、通じたんですね。そして、自分がね、保育所におったのはわかるけど、どんな施設〔だったの〕か〔わからん〕。鹿児島にもいたような気がするけど、わからんと言うんですね。「あらあ、F子ちゃんね。あなた、オオFちゃんよ」「オオFちゃんて、なんですか」「〔龍田寮に〕F子って2人おったけんね、コFちゃん、オオFちゃんって呼んでたよ」って。そしたら、懐かしがってですね。〔鹿児島の〕敬愛園に転園するときに、恵楓園の人の官舎（おうち）に1週間ぐらい泊めてもらって、そして、オバさんと二人で車で敬愛園まで行ったの、そんなの思い出す」って、すっごい喜んでね。そんなこともありました。

木村 私は〔結婚〕しましてね、〔結婚したら官舎からは〕出ました。結婚してからは、家族に啓蒙するのも私の一つの役目だと思ってですね。で、主人もすごく理解があってですね。子どもたちが集まってくるでしょ。そうすると、〔主人は〕国鉄に勤務して車掌をしてましたから、熊本駅まで送って行って、一等車（グリーン）に乗せて帰してましたよ。大阪にいる子どもたちが、「そのことを忘れられない」ちってですね、いつも年賀状に書いてきます。

奥晴海さんのこと

森 〔私たちが龍田寮に来たときには、はるみちゃんは〕1年生にあがってしまいましたね。花組さんにいたですね。

木村 かわいかったですよお、ほんと。そして、何歳で引き取られましたかね。

森 龍田寮から直接〔奄美へは〕行ってなくて、恵楓園に何ヵ月かおったんですね。直接、親戚とかに行つた子と、恵楓園（ここ）にね、ちょっとあれした子がおります。

木村 はるみちゃんなんかも〔だいぶ苦勞〕したでしょうねえ。

〔はるみちゃんとの再会は〕劇的なシーンでした。何十年ぶりだったですかね。連絡があつて、「〔熊本地方〕裁判所へ行きます」「じゃ、そこの玄関で待ちましようね」ということで、〔あらためての〕初対面がそのときでしたね。裁判所の前で抱き合つて、もう、泣きあかしましたあ。

森 そのあと〔彼女が〕くれた手紙をもってきました。ちょっと見てください。

「前略 大寒は過ぎたけど、まだまだ寒い日が続いていますが、いかがお過ごしですか。このあいだの熊本は天気もよく、地裁に着いたとき、弁護士の先生が『晴海さん、あなたが龍田寮にいたときの保母さんたちが見えてるよ』と聞いたとき、私の体の中にこみ上げるものがありました。去年8月、意見陳述で熊本に来て⁸、菊池恵楓園を訪ねたときも同じ気持ちでした。考えてみると、約50年ぶり、お互いが元気で再会できたこと、まるで夢のようです。このハンセン病問題には遺族として触れられたくない部分、また知りたいこと、たくさんあり、また、この裁判のおかげで多くの方と再会でき、心の底から自分の気持ちを話し合えることは、私にとって大きな財産みたいなものです。私にとっては何とでもうれしいです。このあいだは数々のお土産などありがとうございます

ました。家に帰り主人に熊本での話をたくさんしました。主人は涙を流しながら私の話を聞き、今度の熊本行きが一番よかったねと言ってくれましたよ。このようなすばらしい出会いがいまからもできるといいですね。まだ寒い日が続きますが、時節柄ご自愛のほどお祈り申し上げます。またお会いできる日を楽しみに。私たちのおかあさん（おねえさん）へ 晴海」⁹

大事にとります。字が上手でしょう。すばらしい字ですね。

木村 実際には、はるみちゃんとはそんなに長い接触はなかったんですよ。あの子は早く〔奄美に〕帰ったからですね¹⁰。ただ、私は、駐留軍のキャンプ地にクリスマスで呼ばれたときに、はるみちゃんがもらって着た真っ赤なカーディガンを覚えてますものね。いっぱいプレゼントをもらって帰って、〔みんな〕喜んで。

映画「あつい壁」は暗い

森 〔黒髪校事件を題材に1970年に中山節夫監督が制作した映画「あつい壁」あれは最後まで見ませんでしたね。あれは、ほんとにありましたものね。〔龍田寮から子どもが〕逃げて、恵楓園に行っていると〔連絡があって〕、夜中に起きて〔恵楓園まで行って〕。そしたら、門のとこの桜の木の上に、こうね、おってから、もう、ウォウオするのを見てたってというのがね、実際ありましたからね。

木村 龍田寮（ほいくしょ）に、リデルさんが欧州から持ってこられたユーカリの木がありました。そのユーカリの木のまわりを何べん回ったでしょうか。〔小さい子どもを〕おんぶして。〔親が〕収容されたときに、子どもたちが親から引き離されて来るでしょ。そうすると、施設にはじめて入って、眠れなくてですね。もう、泣き叫ぶ子をおんぶしながら、そのユーカリの木〔のまわり〕を右往左往して。それを思い出しますねえ。

はるみさんは、〔だけど龍田寮の〕「明るい情景（あれ）ばかりしか思い出せない」ちってましたね。

森 そうですね。〔あの映画は〕暗いですがものね。〔龍田寮は〕けっこう、にぎやかでしたものね。運動会もありましたしね。〔運動会には、恵楓園に入所している親は〕来てませんね。恵楓園の職員さんが何人か来るぐらいですね。園長が来たりとかね。〔でも〕けっこう、にぎわいました。龍田寮の職員が〔みんな〕一生懸命になって踊りますからね。

木村 お雛さまも、にぎわいでしたよ。龍田寮の歌もあったんです。

森 〔遠足に行ったりもして〕けっこう楽しかった。野球もしてたんですよ。恵楓園の職員さんたちが試合に来てくれて。

あとでは、ほら、分散して社会に出ていかにゃいけんときに、宮崎先生の授業だけではレベルが下がるとるかもしれんからというて、私たち独身が夜ですね、分教場で勉強させたりですね、そういうのもだいぶありましたね。

定年前の数年、福祉室勤務

木村 〔恵楓園の定年は〕60です。最後は患者さんの窓口の福祉係を〔やって〕、それを最後にふたりとも〔定年〕退職しました。

森 全然、〔事務〕本館から出たことなかったんですよ。最後にね、〔一度ぐらい本館から〕出らんとかわいそうかろうちゅって、そのころ〔入所者自治会の〕

会長が河岸（かし）〔渉〕さんで〔そう取り計らってくれました〕。

木村 子どもたちが福祉の事務所を訪ねてくるときは、〔すぐ〕わかるんですよ。遠慮会釈なしに、「おねえさーん」ちゅって入ってくるからですね。

森〔私たちが〕こっちの福祉〔室〕に来たときにですね、こんど、年金係の人が替わったって言って、〔患者さん〕みんなが見に来たんですよ（笑）。職場の人が「ほら、見てごらん、森さん。見に来よってえ」ってね。〔福祉室で年金係をやったのは、最後の〕2年です。名前もね、覚えませんでしたもんね。〔入所者の方は〕名前を、ほら、〔本名に、園名に、筆名にと〕3つも4つも持ってるでしょ。そして、恵楓園の通常はね、誰って〔本名を〕知っても〔口にしていけない〕。〔でも〕年金は本名だから〔私は本名で覚えた〕。ちょっと呼び止めるときなんかでも、本名で、私、言うでしょ。もう、他のひとがしたら、大事（おおごと）になるそうです。私はほら、すまして言うもんだから、「森さんはよかなあ」って言われよりましたね。

いまだに残る分厚い差別の壁

森〔2001年の「らい予防法」国賠訴訟判決のとき、世間では〕「タダで食べて、医療もぜんぶタダ。補償金から、それを引かにかいかん、とかなんか話す人もいましたよ。

木村〔判決の日にはテレビで〕見ました。「勝訴」って出たやつ。私たちから言わせると、当然だと思いますけどね。私は、これから生きていく若い人たちの考え方をね、啓発が大事だと思いますね。とくに、この療養所の近くはですね、やっぱり、いままでの古い習慣にあれしてますから。

森〔2003年の黒川温泉の宿泊拒否事件のときは〕世間から〔恵楓園の入所者を誹謗中傷する〕投書がいっぱいありました。〔世間は〕冷たかったですよね。

あれは、県の対応が悪かったですね。知事さんが〔一緒に〕行ってから、一緒に温泉に入ればね。

木村 私も、そう思いましたよ。「知事が〔入所者のみなさんと〕一緒にお風呂に入れば、なんのことはなかったのに」って。だから、県もはじめからオープンにして、ちゃんと、こんなお客さんって言えば〔ああいう問題にはならなかった〕ですね。

森 龍田寮〔出身〕の〔男の〕子が、結婚して、息子が3人おって。それぞれ、うまい具合に〔すてきな〕娘さんに巡りあって。もう、孫ができて。そして、身分証明かなんか要ったんですよ。それで奥さんが、孫のためにね、夫（おとうさん）と離婚して、ということになった。70ちかくなって離婚したんですよ。そして、いま、病気になって入院してて。子どもたち、見舞いには来るんですけどね。

木村 その奥さんのほうもですね、親御さんが敬愛園に入院してたんですけど、自分は「非らい」だというふうに〔言い出して〕。

森 お母さんが〔彼女を〕連れ子して再婚（けっこん）してるんですね、〔敬愛園に〕入院した夫（おとうさん）と。だから、自分は義父（おとうさん）とは関係ない、と。こっちの男性のほうは〔元は〕韓国〔籍〕で、〔日本に〕帰化してる。そして、両親が〔恵楓園に〕入ってる。それ承知で結婚したんだけど、孫ができて、やっぱり、相手の家族が〔なんやかんや〕言うもんだから、やむをえないということで、〔家を〕飛び出たんですよ。〔彼は〕「孫たちの将来のために、

自分が身を引いた」って、それだけしか言いませんものね。

木村 退職して 20 年経ちました。

森 [退職して] 18 年目に入りました。あつという間ですね。私たち [がいるあいだに] 園長も何代と替わりましたからね。

木村 私は [龍田寮で] 学んだことが、自分の人生のベースになってると思っています。生き方 [を学びましたね]。子どもたちへの接し方とか。やっぱり、この道を歩いてきてよかったと思ってます。いまあるのは、そのあいだに培われた人間性だと思ってます。[私はクリスチャンになっています。] ルーテル [派] ですね。

森 私は [教会には] 話を聞きに行ったりはときどきしましたけれども、信仰には至りませんでしたね。

[人生を] 振り返って、まあ、なんということなく、ぼおっ来たという感じですね。[2004 年に恵楓園で開かれた]「検証会議」に [証言者として] 呼ばれたりもしましたが、特別 [な生き方をしてきたというよりも] なんか日常生活が続いてきたという感じです。

【追記】

わたしたちの聞き取り調査の作法として、ライフストーリーの公表にあたっては、公表前の最終原稿を語り手にお見せすることを不可欠の手続きとしている。今回も、この原稿をお手許にお送りしたところ、木村チズエさんからは 2020 年 11 月 20 日付けのお手紙と、熊本日日新聞の手記「心に残るいい話」の募集に応じて 2020 年 9 月 24 日に新聞社に投稿した原稿の写しを送ってくださった。語り手の近況ならびに龍田寮への思いを表明した貴重な資料として、以下に収録させていただく。なお、達筆の文字の読み取りでは、高鶴礼子さんの助力を得たことを記しておきたい。

また、森三代子さんからも、11 月 24 日に、とてもよくまとめていただきありがとうございますとの趣旨の電話を頂戴した。さらに、現在のコロナ禍がおさまったら、かつて子ども時代を龍田寮で過ごした方たちを紹介して下さるとの、ありがたいお話もいただいた。

* * *

仲々終息の見えないコロナの不穏な日が続いています。

先日は、竜田寮の最後の保母の記録として、丁寧な文章を御送付して頂き感謝しています。

深み行く秋と同時に私の老も深まり、早くお返事をと思い乍ら遅くなってしまいました事、先づおことわり致します。

竜田寮の子供達が年を経て行く様に私も米寿を迎え、体力、思考力、何もかも落ちてしまい、只、生かされてる様な毎日ですが、私の人生が続く限り、竜田寮の問題は私の一部です。

先日地元の熊日新聞で「心に残るいい話」と言ふタイトルで手記の募集がありましたので、応募致しました。コピーを同封しましたので御笑覧下さい。

素晴らしい文章のお便りを頂き乍ら、お粗末なお返事になりましたこと、お詫び致します。

かねて俳句を楽しんでますので、二、三句、記します。御笑覧下さい。私の近況です。

晩禱や夜長通して語りつぐ
健かな老の感謝や稲日和
咲きみちて明日は散り行くカンナ燃ゆ
大阿蘇の尾花一面銀の波
終息の見えぬコロナ禍柚子熟る
どっこいしょ米寿坂越え冬日和
龍田寮その名なつかし紅葉山
遠き児の平安祈り秋の空

つたないお返事で申し訳ございません。乱文、乱筆で相済みません。
今後の益々の御発展と御健かさを祈ります。

2020年11月20日 木村チズエ

福岡安則様

* * *

ユーカリの子供達

木村チズエ

その昔、英国から来日して、日本の社会事業に大きく貢献されたミス ハンナリデルとライト女史、二人を記念して創設された老人ホーム、老健施設が立田山の中腹にあります。その施設に隣接して、現在はなくなりましたが、児童保育の施設があり、六十余名の子供達と十余名の保母、職員の働く寮がありました。

その寮の庭のまん中に、リデル女史の記念のユーカリの木があり、子供達は嬉しいこと、悲しいことも、このユーカリの木と共に育って行きました。

子供達は当時、ハンセン病の親を持ち、この施設で親と離れて育てられ、その恵まれない子供達に大きな社会問題が起きて、やむなくこの施設は閉鎖されました。この事については当時沢山の記録も残され、書籍も出ていますので、私は多くを語りません。当時、働いていた保母も職員もすでに天に召され、現在まだ二名程現存していまして、私もその一人です。施設では四十才位の保母は〇〇お母さんと呼ばれ、私達二十代は〇〇お姉さんと呼ばれていました。乳児から幼児、学齡児と共に生活をしていましたが、年月が経ち、その子供達も還暦を迎えている様です。

特に正月のカルタ会、百人一首を詠む会は思ひ出に残っています。をとめの姿しばしとゞめん、おきまどわせる白菊の花、知るも知らぬも逢坂の関等、いまでも何所からかきこえてくる様な気がします。

手紙をくれる子、訪ねてくる子。今もって米寿の私達を〇〇お姉さんと呼ぶ子供達。私の余命も分りませんが、彼等の幸せを祈りつづけます。若い時に出合った仕事の一端を青春の一頁として記録しました。

註

1 2004年6月16日に菊池恵楓園で開かれた「第18回ハンセン病問題検証会議」で森三代子さんが証言しており、龍田寮の当直の大変さについては次のように述べている。

青組の当直を2人で回すので、結局1日おきとなります。当直の日は子どもたちと同じ部屋で眠り、夜尿症の子どもをトイレに連れていったり、おねしょの処

- 理をしたりと、目が回るような忙しさでした。
- 2 昭和 29 年の高松宮の龍田寮訪問に際して花束贈呈役をつとめたのは、のちにハンセン病家族訴訟の原告となった、当時小学校 2 年生の奥晴海さんであった。
 - 3 森さんの検証会議での証言では、「教育委員会や行政の指導で昭和 29 年〔度〕入学予定の 4 人は本校に通学することが決まりました。しかし、入学式が近づくにつれて反対派の宣伝活動は激しくなっていました」とある。私たちの聞き取りでは、森さんは「〔昭和〕29 年度の入学〔予定者〕は 8 名おった」と明確に述べられた。子どもたちの人数のこのズレは、おそらく、昭和 28 年の年末から始まった「騒ぎ」のなかで、龍田寮の子どもたちの一部が親戚に引き取られるとか他の施設に預けられるという事態が始まっていたからではないかと推測される。森さんは検証会議で「〔昭和 28 年 4 月に〕勤め始めたころ、龍田寮は 1 歳から中学生まで 67 人ぐらいの子どもたちが生活していました」と述べ、私たちの聞き取りでは「〔龍田寮の子どもたちは〕いちばん多いときで 76 人ぐらいでしたよ」と述べている。それが、昭和 30 年の新年度が始まる時点で「龍田寮には 38 人の子どもたちが残っていました」（検証会議での証言）となっている。「騒ぎ」の 1 年ちょっとのあいだに、龍田寮の子どもたちは半減している。私たちの聞き取りでも、森さんは、3 歳児・4 歳児・5 歳児からなる「青組」は「男女一緒に 24、5 人おりました」と述べている。一学年 8 人見当の子どもたちが、小学校に入学する年齢児としていたことになる。昭和 29 年度も、昭和 30 年度も、そういう子どもが 8 人ほどいながら、黒髪小学校への入学予定者としては 4 名に減っていたという背景には、「騒ぎ」を知って引き取りを申し出る親戚がいたり、事前に在日朝鮮人の子どもたちは他園に移されたということがあったのだと思われる。
 - 4 森さんの検証会議での証言には、こうある。

熊本商科大学の高橋学長が間に入り、〔昭和 30 年度〕新 1 年生の 4 人を学長の自宅に引き取って、そこから本校に通わせることを提案し、最終的にはこれが受け入れられました。しかし〔それと引き替えに〕龍田寮そのものは昭和 32 年いっぱい閉鎖されることが決定されました。このとき龍田寮には 38 人の子どもたちが残っていました。その全員を親戚の家や県内の児童養護施設に分散させることになったのです。いったん高橋学長の自宅に行った子どもたちも、この計画に従って施設に預けられました。黒髪小学校の校区には児童養護施設はありません。また、親戚に引き取られた子どもたちは、県外などみんな遠方でした。結局、龍田寮の子どもたちのうち、だれ一人として黒髪小学校を卒業できた子はいなかったのです。
 - 5 熊本日日新聞社編『検証・ハンセン病史』（河出書房新社、2004）には、次のような記載がある。「龍田寮の保母だった森三代子さんは、今でも思い出たびに胸が締め付けられるような記憶がある。／1955 年 2 月 22 日、龍田寮にいた 2 組の姉弟 4 人を、熊本市島崎にあったカトリック系の児童養護施設『聖母愛児園』に移した。／4 人を修道女に託して帰ろうとすると、まだ 4 歳ほどの弟の 1 人がしがみついていた。森さんに最もなついていた子だった。『森ねえのバカ』と泣きわめく子を引きはがすようにしてドアを閉め、森さんはあふれる涙をぬぐった。／この 4 人のうち姉 2 人は 6 歳で、小学校入学直前だった」（147 頁）。なお、文中の「聖母愛児園」はハンセン病患者の民間の収容施設「待労院」と同一の運営主体が設立したものであり、聞き取りで森さんが預けに連れていったと語る「待労院」とは同一の施設を指している。
 - 6 未確認ではあるが、「熊本天使園」のことではないかと思われる。
 - 7 検証会議の証言では森さんは、こう述べている。

龍田寮は昭和 32 年に廃止されました。私は、その年の 2 月に、廃止に先立って恵楓園に配置替えになりました。異動に当たって宮崎園長と主任から「あなたは龍田寮の子どもたちのアフターケアのためにとどまってほしい」と言われました。……また園長は「子どもたちの心に恵楓園という名前は残っているはずだから、いつか訪ねてくる子どももいるだろう。その子どもたちを見届けるためにずっと

ここにいてほしい」とも言われました。

- 8 熊本地方裁判所でのこの時点での「意見陳述」は、「ハンセン病家族」としてではなく、療養所に収容されたハンセン病患者の「遺族」としてであった。
- 9 封筒の消印は、2003年1月29日、名瀬。
- 10 奥晴海さんは、昭和29年の夏休みを恵楓園の両親のもとで過ごして、二学期からは奄美大島の叔母の家に引き取られた。8歳のときだ。彼女のライフストーリーは、黒坂愛衣『ハンセン病家族たちの物語』（世織書房、2015）の「第1話 よみがえった記憶」を参照されたい。

The Last Childminders at Tatsuta Dormitory Attached to Kikuchi Keifuen: Interview on Hansen's Disease Problems

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

On June 18, 2012, Yasunori Fukuoka and Ai Kurosaka visited Keifu-So, the visitors' lodge in Kikuchi Keifuen, a national Hansen's disease sanatorium in Koshi City, Kumamoto Prefecture to meet Ms. Chizue Kimura (born September 13, 1932, 79 years old at the time of hearing) and Ms. Miyoko Mori (born April 1, 1934, 78 years old at the time of hearing).

These two are the last nursery teachers at Tatsuta Dormitory, the orphanage attached to Kikuchi Keifuen.

Despite being women born in a rural area in the early Showa era, both of them graduated from senior high school which was changed from the old system to the new one after the Second World War. Although their families were not so wealthy, their parents' support and their willingness to study made this possible. Kimura worked at Tatsuta Dormitory in December 1952 and Mori in April 1953. During this period, "Leprosy-Free Campaign" was swirling. But their parents supported their daughters' job, saying that tuberculosis is scary, but leprosy is not contagious. It is interesting that they had such recognition even though they were towners near the leprosy sanatorium.

In Tatsuta Dormitory, about 70 children from zero-year-olds to junior high school students, whose parents had Hansen's disease and were admitted to Keifuen, lived in the dormitory. At the end of 1953, the director of Keifuen, Dr. Matsuki Miyazaki, appealed that it was unfair that elementary school students in Tatsuta Dormitory were not allowed to attend the local Kurokami Elementary School, and demanded new first graders' enrolment to the local school, and then so-called "Kurokami School Incident" or "Tatsuta Dormitory Incident" broke out. The majority of local residents organized a movement to refuse Tatsuta Dormitory members' enrolment to the school, and also strongly demanded the shutdown of Tatsuta Dormitory itself.

From the story of the two, we learned that they tried to protect the children from the prejudice and discrimination of the majority residents, and even after the Tatsuta Dormitory was closed, they continued to work as the clerk of Keifuen and keep their official residence as the home where the children from Tatsuta Dormitory can come back during the Bon Festival or New Year holidays. For the children who were labeled as "Uninfected Children", the two dedicated their whole lives without shaking their devotion to the children.

Keywords: Hansen's disease problems, attached orphanage, Tatsuta Dormitory, life story